……わがぬれぎぬはほせど　かはかず

の如きものである。つまりは・も以外に、これらのテニヲハも結びを支配するのであるから、一括して徒といふといふのである。彼は、「徒とはぞ・の・や・何・こその外なる辭どもを名くるよし瓊綸にいはれて」といつてゐるが、宣長の玉緒には、「徒とはは・も・ぞ・の・や・何・こそなどいふ辭のなきを今かりにかくいふ也」とあるのである。廣道は宣長の言葉を正しく解したとはいひ難いであらう。

宣長が「ぞのや何」としてゐるのを、のと何とを除いてかを入れた點は、すぐれた見解であつて、現在でも認められてゐる。彼は宣長がのの結びであるとした例はすべて「いひさして意を含め殘したる略語の格にて、全く結び終りたるものとは見えず」といひ何の方については、

何等とかと重なる時は、かならずかを語の下におく例なれば、結びの脉は上のかより受べきこと、さしあたる理なり。然るをいかにして考へ混へられけん悉く何等の結びとしてかの係辭をばやに屬たるごとく傍にせられたるより、此〻件のことどもはいみじくしひごとにはなれるなり。さてまた何等と結辭との間にかもじなきは、なほその結辭にても意義盡ずして治定せざる歌どもなり。されば決く何等の結びとは定めがたし。

と說いてゐる。かうして「略語の格」を說き、何を係辭から除いたので、玉緒に變格としてあげた所は、

右にいへるいひさして殘る意をふくめたる略語の格と、何等の下をつねのごとく結びたるとのみにて、別に變りたる格なるにはあらず。

といふことになる。この變格に對する說明は、守部もしてゐることは前にのべた。その何なり等についての說は、守部は何を係辭と見てゐるので、廣道の說には及ばないといはねばならぬ。なほ明治に至つて黑川眞賴の說に基いて三田葆光といふ人のものした「玉乃緒變格辨」一册がある。明治十四年に出來たものであるが、出版は明治十六年になつた。今黑川眞賴全集第六に收められてゐる。徒やの何等には輕い場合と重い場合とあつて、輕い方の時は普通に結び、重い方の時は連體形で結ぶので、別に變格ではないといふ說である。

黑川眞賴大人のいへらく、こは變格にはあらず、もとより定まれる一つの格なり。(中略)徒は紐鏡にはもぞのや何のかゝりのなきを、かりに徒と名目をつけられしなれば、輕きにも重きにもつかざるものなり。また何もそれとさしたるものもなきほどの言葉なれば、これもまた輕きにも重きにも、一方にはかたよらざるなり。されば徒と何とは、もと輕重の二種ありて、そのつかひざまによりて重くも輕くもなれば、輕くいはむときはかろき方に結び、重くいはむときは重き方にむすぶぞ、古よりの定まれる格にはありけるといはれき。

「中島廣足」の詞玉緒補遺は六册ある。嘉永五年(二五一二)七月に出來、同年十月の源敎定の序、安政二年の鈴木重胤の序、同五年の西田秋實の序同年十二年の島重道の跋等をそへて刊行せられてゐる。「おほむね」に記すところによれば、最初に書集めた草稿は大部なものであつたが、義門の綵分、義言の末分、櫛廣道の係辭辨などが出て、玉緒については今さらいふべき節もなくなつたが、なほいひ殘されたことがないでもなく、自分の擧げた證歌も多くあるので、うちすてゝもおかれずして書いたものだといふ。で、證歌などもそれらの書にあげられたものは皆省いて、他のをあげたといふ。

この人のテニヲハ研究に對する意見は、同じく「おほむね」の中に記されてゐる所によつて知られる。

おのれ常にいへるは、すべて古語は同語の歌文をこれかれ多くよみわたしてよく味ひ見る時は、註をまたずしておのづから其意身にしみて、辭の輕重緩急明らかにしらるゝもの也。たとへばみどり子のもののいひならふに、此語はしか〳〵の意ぞなどひとつひとついひをしふるものにはあらず、たゞかたはらの人のつねにいふをおほく聞なれて、おのづから其意をしりていひ出るもの也。今ノ世にして古語の味ひをしり、みづからよくつかひなすも、此こゝろばへにおなじかるべし。されば古語を擧ヶるに、いつもいつもうるさきまで其例をならべ出せり。てにをはのとゝのへはたゞ是におなじければ、此書にもいさ〳〵おほく證歌を擧ゲしも、あるは見む人うるさくおもふべけれど、中々にこまやかに註して初學の人のまどはしからむりは、例のみ多くあげたるが、かへりて其味ひをみづから心にしむるには、たよりよからむことをおもへばなりけり。

又いふ。

近ごろ氏爾乎波語格の書ども、つぎ〳〵おほく世に出ッめる中に、其解ヶるやう、此辭はしか〳〵の辭の重なり約まりたるにて其もとしか〳〵の意なり。などいとくはしく解しめしながら、かへりて證歌を擧ることは少きもあり。さてしかこまやかに其もとの意をのみ解しめす時は、初學の人中々にまどはしき事もおもく、又其ときたるやうをかたくなに心得なども して、みづからつかへるにかへりてもてひがむることもおほかめり。されば氏爾乎波語格は其もとの意を解ことはしばらくおきて、たゞ古人のつかひなしたるおもむきをよく味ひしるにしかず。

かういふ考へで、數多の證歌を集めてゐるのである。この書は一名を手引糸といふ。

幻袍菴の詞玉緒延約は上中下三册ある。表題には略して玉緒延約とある。幻袍菴は安政六年(二五一九)に六十四歳で歿した釋日善のことで、この書は幻袍菴の口授を宇津忠重等が筆記したもので、この口授の十六年程前に、幻袍菴は盲目になつた由が斷つてある。書名については凡例に、

此書を詞玉緒延約と號けかつ板に彫れる由縁は、本居ぬしの詞玉緒は敷嶋の道にいる人の枝折に物せられし書ながら、彼ノ格此格といと多に建られたるが中には、おなし條なるをも異れる條の樣に分て擧られたる上に、さらに又一ツの格一ツの何などとさへ分られたれば、初學には中々に煩はしく、また其語意語釋を能ク解分られたるは少く違へるが多く、また語釋なきが多ければ、いよよ初學の人には思ひ煩ふ事なむ多かりける故、われらが師幻袍菴の聖そをいたく愁ひ給ひて、その玉緒の同じ條なるを別條にせるなどは上の一條に約め、彼說の違へるをば正し足らざるをば辭を延し、語意語釋を篭(ツヾラ)にしてさとし給へれば、詞玉緒延約とはいふなり。

とあるので知られる。この人は「含てにをは」「含語」「約語」「疊語」等をとく。そしてそれを以て玉緒を批評してゐるので、二三の例をあげるならば、紐鏡第二十一段に對する證歌について、

[の]あかざりし袖の中にや入にけむ我たましひのなきこゝちする。(△ハ)

△今云此歌引違へり、凡ノとかゝりてルと留るは、ゾは重くノは輕しと上にも云し如く、ガと聞べきノ文字也。今の歌はさにあらず。含てにをはの歌にて、「我魂のなきこゝちするハあかざりし袖の中にや入にけむ」と上へかへる部類の歌なり。

[や]みるめなき我身をうらとしらねばや(△ナラム)かれなであまの足たゆくくる(△ハ)

△今云此歌引違へり、ヤとかゝりてルと留れるにはあらず。ヤ文字の下にナラムのてにをはをふくめたる也。

玉緒二の巻の變格の歌について、

　夏のよの月待ほどの手すさびに岩もるし水いくむすびしつ（ツラム）

　高砂のをのへの櫻尋ぬればみやこのにしきいく重（△モ）かずみぬ

△今云前の歌はツラムの約まり也。次のはいく重の下にモと含めたる也。

宣長は、いくといふ疑問語がある故連體形で結ぶべき所を終止形で結んでゐるといふので變格としたのであるが、幻稚菴はかうした約語、含てにをはの說から、變格ではないとするのである。又玉緒二の巻の「てにをは不調歌」の「その部の例でいへば、

　夏の夜も涼しかりける山川ぞ波のそこにやあきは宿れる

は、ぞがいけないと宣長はいふのであるが、

△今云山川ぞ夏のよもすゞしかりける、サテハ波のそこにや秋はやどれラムとなり。三句を上へ廻してみるべし。

と幻稚菴はとくのである。又、同じ所の、

　からごろも君がこゝろのつらければ袂はかくぞそほちつゝのみ

は、「語句の末にアルといふ語をふくめ」たもの、

　朝霜の花野のすゝきおきてゆく遠方人の袖かとぞ見ゆ

は、「ユルの疊語なる事上のごとし」といつてゐる。

　後瀬山のちもあはむと思ふにぞしぬべき物をけふ迄もあれ

は、あれの方では說明がつかないので、

△今云此ゾはコソと云語のたゝまりてゾといへる也。是を疊語のゾといふ。

と說明してゐる。疊語と約語との區別はもとの音數にあるらしく、ユルがユとなり、コソがヅとなるやうに二音が一音になつたものを疊語といひ、三音が一音になつたのを約語といふやうである。それもコソがどうしてゾになるか、反切の法ではさうはならない筈なので、結局都合のよいうやにこしらへたものだとの非難は免れまい。殊に約語の例には、

　おくれて秋はいづくまできぬ（ヌラム）

　君がおもひのぼどやすくなき（カラム）

　殘る松さへみねにさびしき（クアリ）

の如きもあつて、右傍の片假名で書いた音が約まつて、ぬ、き等の一音になつたといふのであるが、カラムもキになりクアリもキになるといふのでは、我々を納得させるだけの說明をつけない限り、勝手な說だといはざるを得ない。

この他慶應四年（二五二八）刊行の中村尙輔の玉緒繼添（コリソヘ）、又寫本のまゝ傳つてゐる種々な研究があり、名前は幾つか前にもあげておいたが、內容の紹介は今は省略に從ふこととする。かうして玉緒は多くの人に研究されたのであるが、玉緒自身が係結びを研究したものであるために、後のものも中心がそこにあつて、そこからはなれてテニヲハそ

のものを分類し研究して、その本質を見るといふやうなことは行はれなくて、今いふ動詞形容詞の語尾、助動詞、助詞等を一括して、テニヲハとして扱つてゐるやうな状態であつた。西洋文典の影響をうけて國文典が發達し、言語の分類的研究がくはしくなるにつれて、それがはつきり分けられるやうになつた。その經過はここには省略するとして、たゞ大槻博士が廣日本文典において、あらゆるテニヲハ(狹義の。今いふ助詞(を用法によつて、第一類名詞にのみつくもの、第二類種々の語につくもの、第三類動詞にのみつくものと、三類に大別して説かれたこと、次には山田孝雄氏が日本文法論において、

助詞
- 特定の關係を示すもの
  - 句成分に關するもの……
    - 格助詞 (1)
    - 副助詞 (2)
  - 句その者に關するもの
    - ……接續助詞 (3)
    - 述素に關するもの……
      - 係助詞 (4)
      - 終助詞 (5)
- 特定の關係を離れたるもの……間投助詞 (6)

の如き分類を示されたことを、注意すべきものであるとしてこの章を結ばうと思ふ。なほ本講座木枝講師の文法及口語法第七章をも參照せられたい。

第六章　活用

活用の研究は假名遣やテニヲハの研究に比して頗るおそくおこつてゐる。尤も行阿假名遣にも

ゑふ　ゑひて　えふとも　醉・沈・淵
くはへて　くはふとも　噬
ちかひて　ちかふとも　誓・盟・矢
やまひ　やまふとも　病・痾・疫・疾

といふやうな例があり、その後の假名遣者が五音相通説をとり入れて行阿假名遣に説明をつけ、例へば延寶四年に刊行された「一歩」が、

△中のえの假名を書事
消　きえ　きゆる　越　こえ　こゆる　見　みえ　みゆる　絶　たえ　たゆる
かやうにゆえと通ふ類也。是やゐゆえよの五音の通ひ也。

といふやうなとき方をしてゐる所はあるが、要するに假名遣を知ることが目的であつて、この語尾變化が文法上の種々の職分を盡すといふことを考へたわけではなく、五音相通といふ以上には考へてゐなかつたのである。

契沖には、和字正濫鈔の中に、
愈　いえ　いやす　いゆさはたらくにてえなる事知るべし。
消　きえ　きゆ　きやすとはたらけり。

の如く「はたらく」といふ言葉も見え、
使　つかひ　つかふといふ用の言を體にいひなすなり。

障泥　**あふり**　和名。あふるといふ言を體になしていふなり。

の如く用の言、體の言といふやうな言葉もみえ、活用研究に入るべき萠芽は見られるが、それ以上には進まなかつたのである。

動詞の活用を五十音圖に配當して示したのは、日本書紀通證の巻一の附錄の中にあるのが最初である。日本書紀通證は和訓栞の著者谷川士清の手になり、例言の終に延享戊辰三月と日附がある。即ち延享五年(二四〇八)である。その圖は左の如きものである。

倭語通音

	聲韻一體	未定韻	已定韻	告人韻	自言韻		
過	ア	イ	ウ	エ	ヲ		今按倭語ノ活用
書	カ	キ	ク	ケ	コ		自有ニ音韻ノ次序一、
指	サ	シ	ス	セ	ソ		今借ニ態藝十字一
立	タ	チ	ツ	テ	ト		以發ニ揮其義一、但
往	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ		首尾過請ノ兩韻
言	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ		取ニ通音一非ニ正義一
産	マ	ミ	ム	メ	モ		也、蓋第五之十
悔	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ		韻皆非ニ雅語一、故
斬	ラ	リ	ル	レ	ロ		詠歌讀書古今
請	ワ	ヰ	ウ	ヱ	オ		不レ用レ之、是自然
							之妙爾。

此圖表の説明ともいふべき言葉が、和訓栞の大綱の中に見えるから、次にそれをあげる。和訓栞は前編三十八巻、中編三十巻、後編十八巻ある辭書で、本居宣長の序をつけて、首巻と一巻から十三巻までの十四冊が、安永六年(二四三七)に刊行になり、以下數度に刊行された。士清は安永五年に七十歳で歿してゐるのであるが、和訓栞の出來上つた年月は不明である。

〇大よそはたらかす和語は皆おのづから音韻の序であり、假令ばかきくけこを書にていへば、かきといふは未定の辭也、かくといふは已定の辭也、かけといふは人に令するの語也。かことい ふは自ら爲の辭也。たちつてとを立にていへば、たちといふは未定、たつといふは巳定、たてといふは人に告る、たとといふは自ら言へる也。十行皆此義にたがふ事なし。そが中に、かこ、たとなどいふ第五にあたる詞は雅語にあらず。よって古來詠歌に

も讀書にも用ゐざりき。五音の終の位なるをもて成べし。それを詠歌讀書にはかゝん・たゝんなどといへり。んも又詞の終とするによくかなへり。

○あかさたなはまやらわ、横行第一位の十音は、諸辭の體にして、活用する時は是もまたかゝん・たゝんなどといへり。終りを始めにめぐらし、をこそとのほもよろおの第五位と其義一に相通ふもまた妙ならずや。字音の假名にあう・をう・かう・こう十音皆同じく第一位と第五位と一音に聞ゆ。さればかゝん・たゝんなどいふ時は、決して決せざるの意味を含めり。んは五十音の餘韻なるをもて成べし。

イ列の所を未定としたのは、例へば書きでいへば「書きたり」となるのか、「書き易し」となるのか、次に言葉がつかなければ分らないといふ意味からであらう。

これについては賀茂眞淵の語意考（第三章—七四頁—參照）の説がある。語意考では

ア列を	はじめのことば	初
イ列を	うごかぬことば	體
ウ列を	うごくことば	用
エ列を	おほすることば	令
オ列を	たすくることば	助

と名づけて、次のやうに説明してゐる。

○加左多奈波麻也良和（カサタナハマヤラワ）を初めの音（コヱ）と名づく。例へばゆかん・こさん・かたんなどの類ひ、其事を初めて起こす言（コト）なれば、自ら初めに居れり。

○幾志知仁比美伊利爲（キシチニヒミイリヰ）を體音（ウゴカヌコヱ）と名づく。例へばかかぶり（冠）と云ひ、あふぎ（扇）と云ふ類ひに、其物と定まれる時の言なり。此の幾志知仁（キシチニ）云々（シカジカ）の音、萬づの言の終り有る時は、其事定まりて動かず。其言既に起りて後定まれるからに二に居れり。

○久須門奴不武由留宇（クスツヌフムユルウ）を用音（ウゴクコヱ）と名づく。例へば右に云へるカカブリを、今カカブルをカブルと云ひ、扇を動かし用ゐるをばアフグと云ふ類ひ、其の物のわざを云ふ言なり。故（カレ）此言萬づの下に有る時ははたらけり。既に事定まりて後にはたらけば三に居れり。

○計世天禰反米衣例惠（ケセテネヘメエレヱ）を令音（オホスルコヱ）と名づく。例へばナセ・ユケ・イへなどの類ひなり。是を言の下に用ゐる時は人に云ひ負（オホ）する事と成りぬ。言既にはたらきて令（オホ）するからに四に居りぬ。

○袁巳曾登乃保毛與呂於（ヲコソトノホモヨロオ）を助音（タスクルコヱ）と名づく。是は萬づの言の下にのみ附きぬれば、助音とし、且つ終に居れり。

これを士清の説に比すると、エ列については何れも同じであるが、他は少しづつ違つてゐる。士清もいきしちにひみいりゐの第二位は、未定の詞なれども體となり、うくすつぬふむゆるうの第三位は已定なれども用となる。

といつて、イ列の音で體言をなすことは注意してはゐるが、動詞としてのはたらきの上に重きをおいて、未定と名づけたのであるが、眞淵は體言となる方を重く見たのである。ア列は何とも仕方がないが、イ列以下は、それでとめて承接する語がない場合の意味を主として考へたのであらう。

オ列は、士清は、自らいふ言とし、眞淵は助くる言とした眞淵の方は動詞の語尾としてのものばかりでなく、テニヲハまでもふくめてゐるので、頗る意味が廣い。次の説明で推察しうるであらう。

○衰(ヲ)に三つ有り。一つには是れを・彼れをと云ふは其言を下べにし付くる助音(タスクルコエ)なり。二つには與(ヨ)に通ひて令(オホス)る音なり。三つには唯だに言の餘りの音のみ。

○己(コ)は雅言(ミヤビコト)にはあらず、平言(ツネゴト)なり。例へば雅(ミヤビ)にはユカン・ユカモと云ふを、平言にはユコと云へり。さて己(コ)より於(オ)まで斯く樣に云ふは皆平言なり。

（註。當時はオヲの所屬を誤つてゐたので、於はヲ行である。）

○曾(ソ)は是れゾ・彼れゾ・人ゾ・我れゾなど云ひ定むる助言(タスクルコトバ)なり。また曾(ソ)を淸みて云ふは異にて、勿來曾(ナコソ)・莫戀(ナコヒ)曾(ソ)の類ひ皆令(オホ)する辭なり。

かくを〻ぞ等のテニヲハまでを、動詞の語尾である他の四種と同列に見たのは眞淵の誤で、自言と名づけてテニヲハを含ませなかつた士清の方が、考がすぐれてゐると言はねばならぬ。然し活用については、士清にも

悔ヤ	イ	ユ	エ	ヨ

の如く無理なのがある。眞淵にもまた、

おいん將老	おい	おゆ	おえ	およ
もいん將萌	もい	もゆ	もえ	もよ

の如き例がある。眞淵は之に說明を加へて、

○老(オイ)は紀に老此日ヲ於由ニといひ、萬葉に於伊(オイ)また於與(オヨ)とも有れば也行の伊(イ)なり。然れど萬葉に於與之(オヨシ)をばと訓み(ヨ)しは伊を轉ぜしのみなり。此處のオヨは前後の例の如く平言(ツネゴト)と心得べし。

○オエのエは由計(ユケ)の約にて、老イユケと令(オホ)する言なり。次のモエも均し。

○萌(モユ)はモユ、モエとはたらくは常なり。萬葉にもゆる事を毛伊(モイ)つつとも詠みたれば、是れも也行に入るなり。是れを推すにモイン・モヨとも云ふべし。また令の所にモエと云ふエは、由計(ユケ)の約にて、モヘユケてふ言なり。常云ふモエとは異なり。

といつてゐる。五音相通の說と延約說とに捉はれて、純粹に文獻的にゆき得なかつた故の誤である。

本居宣長に至つて、活用の研究は頗る進步した。士清や眞淵はすべての活用を同一に見て、といふよりはむしろ、五十音の橫列の意味をまづ考へて、すべての活用をそれにおしあてゝ行つたので、活用の形がいろ〳〵あるといふことは考へなかつたのであるが、宣長はその點に注意した。宣長の活用に關する著書は「御國詞活用抄」一卷であるが、これには

第一會	カ	キ	ク	ケ	
第二會	サ	シ	ス	セ	
第三會	タ	チ	ツ	テ	
第四會	ハ	ヒ	フ	ヘ	
第五會	マ	ミ	ム	メ	

第六會　ラ　リ　ル　レ
第七會　ケ　ク　クル
第八會　セ　ス　スル
第九會　テ　ツ　ツル
第十會　ネ　ヌ　ヌル
第十一會　ヘ　フ　フル
第十二會　ム　メ　ムル
第十三會　エ　ユ　ユル
第十四會　レ　ル　ル、
第十五會　ヱ　ウ　ウル
第十六會　キ　ク　クル
　　シ　ス　スル
第十七會　チ　ツ　ツル
第十八會　ニ　ヌ　ヌル
第十九會　ヒ　フ　フル
第二十會　ミ　ム　ムル

第二十一會　イ　ユ　ユル
第二十二會　リ　ル　ル、
第二十三會　エ　ウ　ウル　得
　　ネ　ヌ　ヌル　寢
　　ヘ　フ　フル　經
　　ヰ　ウ　ウル　居
第二十四會　シ　ス　スル　爲
　　キ　ク　クル　來

の如く、すべて二十七會に分類して、各會に屬する語彙を集めてある。第二十三會以下二十六會までは代表の語尾があげてない。二十三會はこゝに見る通り二段活用の例であるが、將然形連用形終止形が一音であるために語尾が分けられないので代表の語尾がないわけである。二十四會は變格、二十五會は一段、二十六會は形容詞のク活、二十七會にはシク活を集めてある。この分類は慾をいへば、二十三會に語尾の分けられない二段活用を集め、二十五會に一段活用を集めたやうに、第一會から第六會までの四段活用も一括して考へ、第七會から第十五會の下二段活用も一括して考へるといふやうなこともありたかつたのであるが、そこまでには考へ及ばなかつたのであつた。そこまでは望まないにしても、この書の不整頓な點をあげるなら、第三會の次に、

第三會下　ナ　ニ　ヌ　ネ

として、イヌ・シヌをあげ、第十六會キ・ク・クルの次に、第十六會下、シ・ス・スルとした如きは、此の分け方で統一するなら當然一會として獨立せしむべき所であり、これを下として附屬せしむるならば、一歩すゝんで四段、上二段等に一括することを考へてもよかつた筈であつた。

なほ、イヌ・シヌを第三會下でナ行四段に出し、更に第十八會に上二段として出したり、さすがに

此類は同じラリルレのはたらきながら、リとすわる詞なるゆゑに別にこゝに出せり。

と斷つて別に一括してはゐるが、アリ・ヲリ・ケリ・ナリ等を、第六會の中においてあるなどは、惜むべき點である。要するに宣長は、係結びの研究からかうした活用の形の幾種類もあることには氣がついたけれども、之に承接する他の詞との關係がどうであるかといふことまでは深く考へなかつたのである。

御國詞活用抄は天明二年(二四四二)十月には既に脫稿してゐたといふが、板になつたのは明治十九年であつた。さて宣長の研究をうけて、それを一層完全に近づけたのはその子春庭である。春庭の活用に關する著書は詞ノ八衢と詞ノ通路とある。八衢は二卷、文化三年(二四六六)に稿成り、同五年に刊行された。八衢といふ名は「おなじ言の葉もその活ざまによりていづかたへもおもむきゆくものにしあれば、道になぞらへて」つけたのだといふ。初に活用の靈妙なことをのべてゐる。

詞のはたらきは、いかにともいひしらずいとも〳〵くすしくたへなるものにして、ひとつことばもそのつかひざまによりて事かはりはたらきにしたがひつつ意もことにきこえなどして、ちぢのことをいひわかちよろづのさまをかたりわかつに、いさゝかまぎるゝことなく、又見るもの聞もの人の心におしこめたるおもひのくま〳〵、すべて世ノ中にありとしあること、いく千萬のことなりとも、いひ盡しまねびやらむにたらはぬことなくあかぬことなきも、此活(ハタラキ)によるわざになむありける。

この書は、し・しき・しく、し・き・くとはたらく詞も多いが、これはカ行だけであるのに對して、四種の活は五十音の十行に亙つてあるし、從つてその詞も大へん多いからまづこの四種の活をさとさんとして書いたものだと斷つてゐる通り、動詞の活用だけについてのべたものである。四種の活といふのは、四段の活、一段の活、中二段の活、下二段の活の四つで、これらの名稱は春庭が新につけたものである。中二段は今の上二段に當る。その示した四種の活の圖は次の如きものである。

四種の活の圖　并受るてにをは

此處四段の活と一段の活とは切ると續くとを兼て一ツなるを、中二段の活下二段の活にては二ツにわかれたり。

	四段の活	一段の活
	飽　押　打　逢　住　釣	射　着　似　干　見
	(か)(さ)(た)(は)(ま)(ら)	(い)(き)(に)(ひ)(み)
	ず　で　じ　ぬ　ん　まし	ず　で　じ　ぬ　ん
	(き)(し)(ち)(ひ)(み)(り)	
	て　けり　けん　つる　し	て　けり　けん　つる　し
	つゝ　き　なば　ぬる　しか	つゝ　き　なば　ぬる　しか
	(く)(す)(つ)(ふ)(む)(る)	(いる)(きる)(にる)(ひる)(みる)
	めり　らん　べき　らし　こ　とも	めり　らん　べき　らし　と
	かな　まで　に　を　より	かな　まで　に　を　より
	(け)(せ)(て)(へ)(め)(れ)	(いれ)(きれ)(にれ)(ひれ)(みれ)
	ば　ど　ども	ば　ど　ども

段	詞	受るてにをは	受るてにをは	切るゝことば	受るてにをは	續くことば	受るてにをは	こその結辭	受るてにをは
	居	(ゐ)	まし	(ゐる)	とも			(ゐれ)	
中二段の活	起 落 戀 試 老 懲 率	(き)(ち)(ひ)(み)(い)(り)(ゐ)	ず で じ ぬ ん まし / て けり けん つる し / つゝ き なば ぬる しか	(く)(つ)(ふ)(む)(ゆ)(る)(う)	めり らん べき らし と とも	(くる)(つる)(ふる)(むる)(ゆる)(るゝ)(うる)	かな まで に を より	(くれ)(つれ)(ふれ)(むれ)(ゆれ)(るれ)(うれ)	ば ど ども
下二段の活	得 受 痩 捨 兼 辨 攣 消 枯 飢	(え)(け)(せ)(て)(ね)(へ)(め)(え)(れ)(ゑ)	ず で じ ぬ ん まし / て けり けん つる し / つゝ き なば ぬる しか	(う)(く)(す)(づ)(ぬ)(ふ)(む)(ゆ)(る)(う)	めり らん べき らし と とも	(うる)(くる)(する)(つる)(ぬる)(ふる)(むる)(ゆる)(るゝ)(うる)	かな まで に を より	(うれ)(くれ)(すれ)(つれ)(ぬれ)(ふれ)(むれ)(ゆれ)(るれ)(うれ)	ば ど ども

此處一段の活中二段の活下二段の活は一ッなるを四段の活にては二ッにわかれたり。

かうして更に各活用についてくはしく説明してゐるのであるが、かく助動詞や助詞の承接を明かにせられたのは注意すべきである。更に活用の見分け方について次の如くのべてゐる。

さてかく受るてにをはを圖などにも出してわづらはしきまでいへるを、無益のことゝ思ふ人もあるべけれど、すべて受るてにをはは圖の如く横に通りて少しもたがふことなく、いと正しく、又四種の活詞をわかちしらんにこの受るてにをはをもてさだむるが肝要なれば、よく辨へしめんがためなり。そは、ずでじぬんましのてにをはを第一の音かさたはまらよりうくるは四段の活詞としるべく、第二の音いきちにひみりゐより受るは一段の活中二段の活詞としるべく、第四の音えけせてねへめえれゑより受るは下二段の活詞としるべきなり。此外もすべて右の如く、受るてにをはによりて其はたらきざまのしらるゝなり。そは受るてにをはのことをいへる所々、又圖をよく見てしるべし。

又、世に所謂下知の詞は四段の活では第四の音がそのまゝなるが、一段の活ではイ列の音によ、中二段の活も同様下二段の活ではエ列の音によをそへていふので、よを添へなければ下知にならないが、古くは下二段にはよを添へなかつたこと。ゆかなん、ゆかね、ゆきなん、ゆきね等の意味のちがふこと。中二段下二段の詞の口語の活用のこと。四段の活における例へば「咲けり」といふやうないひ方のこと等を說いてゐる。この最後の問題についても、

さてこのさけるおもへるかすめるなどを、やがて一ッの詞として、羅行の四段の活に入るべきさまなれど、受るてにをは、るれよりうくるは四段の活に全くおなじけれども、らりより受るてにをはいさゝかことにして、四段の活の詞ともしがたし。そはさけらんさけらばなどはうくれど、さけらじさけらましなどはうくまじく、さけり。

せばさけり。しかなどはいふべけれど、さけりて。さけりぬなどはいふべからざれば也。

と、さすがに考の深い所を見せてゐる。

かうして次には更に五十音の各行について、その行にある活用の圖をつくり、それに屬する言葉を出來るだけあげ、かつ耳になれぬ古い言葉には、記・紀・萬葉・和名抄・新撰字鏡・日記物語類・勅撰和歌集等から例證を集めてゐる。

四種の活には變格活用は含まれてゐないが、それは前にも、

　又此四種の活の同じたぐひにて、いさゝか活ざまの異なるあり。そをかりに變格と名づけて、其詞ある行(クダリ)の圖に出せり。そのよしは其所々にいふべし。

と斷つてある通り、各行における調査には皆あげられてゐる。卽ちカ行においては、四段の活・一段の活・中二段の活・變格の活・下二段の活と五ツの活用があり、變格については、

　變格の活はくるといふ詞のみにて此外なし。活きざま受るてにをはなど圖の如し、但ししかのてにをはをうくるは、きし、きしかなどきよりのみ受る格なるを、それはいとまれにて、こし、こしかなどこよりうけたる多し。さてすべての活に第五の音で活くことこれのみにて外に例なし。又下知の詞にはこのみいへる例なり。

と說明がある。こゝに注意すべきは、カ行にはもう一つ下一段活用がある筈であるが、春庭はこれをあげてゐないことである。カ行下一段は中古ではケル(蹴)一語であるが、この語は八衢では、ワ行の所に、

　○くうる　古事記上卷に蹶散(クエハラ・カシ)、又蹶離(クエハナチ)、日本紀に蹴散此ヲ云ニ倶穢簸邏々箇須一などあり。さて和名抄に蹴鞠世間云末利古由とあり。同じ詞なるをかくいひては、也行の下二段の活にて假字も異なり。此ころはやく誤りたるにや。

とあるので、古語のワ行下二段を正しいと見、ヤ行下二段を誤と見、從つてカ行下一段などは俗言としてあげなかつたのであらうと考へられる。

又、ラ行においては、變格があげてない。但し終止形が普通の四段活用と違ふことは、宣長の御國詞活用抄にも既に指摘してあるので、春庭もそれは知つてゐるのであるが、これは、カ行サ行ナ行等の變格に比して、形のちがひがなく、言ひきる時の違ひだけで、

　其外めりらんべきらしなどのてにをはをうくるはすべてにことなることなし。

と考へて、變格と立てるまでに至らなかつたのであらう。これらや、形容詞のク活シク活を、(これについては、「別にあらはすべし」といつてゐるのではあるが)研究して示してくれなかつた點などが、八衢について遺憾な點であると言はれてゐる。

次に詞の通路は刊行年月は明かでないが、文政十一年(二四八八)の本居太平の序がある。著者春庭はこの年十一月に六十六歲を以て歿してゐる。

初に、國語の法則の正しくくすしきことをのべて、

　かゝればもの學びせむともがらは、いにしへのあとをよくかむがへしるべきなり。

　　世々ふかくしげること葉のかよひ路は
　　あとふみみてぞゆくべかりける

　さて今の人は詞の意をとかくいふめれど、其つかひざまをいかにともいへる事なし。詞の意をしらむよりはそのつかひざまをよくわきまふべきことなり。

といふ意見をのべてゐる。書名は右の歌によつてつけたのである。上中下三巻で、詞の自他の事・詞の兼用の事・詞の延約の事・詞天爾乎波のかゝる所の事等についての研究がある。宣長の著「玉あられ」(寛政四年刊)の中にも、流るゝ水、かくるゝ月などいふべきを、流るゝ水、かくる月などといふのは、るが一つ足らないから語がとゝのはぬことをのべて、

　さて又此類の中に、るのあるとなきとにて、自他の意のかはる詞もおほし。たとへば、とく紐といへば紐を人のとくこと、とくる紐といへば紐のおのづからとくる事也。又たつ烟といへば烟のおのづからたつこと、たつる烟といへば烟を人のたつること也。

といつてゐるやうなところはあるが、自他といふことについてまとめて研究したものはなかつたので、自他についての研究は通路が最初である。

通路の自他の考へは、前の宣長のよりずつと廣い。彼はいふ。

　世の人自他の詞はたゞ烟などのたつといふはおのづからたつことをいひ、たつるといふは人のたつる事をいひ、また花のちるといふはおのづからちること、ちらすといふはかぜなどのちらすことなどとのみ、なほざりに思ひてくはしく考へしるべき事ともおもひたらず。(中略)さて自他の詞六つにわかれたれば、今六段に次第してその詞をほどこし、一目に見わたしこゝろえやすからむために、圖をつくりてさとしたるなり。

今その圖を抄出するならば、次の如くである。

おのづから然る みづから然する		四カ　おどろく			下ヤ　きこゆる	
物を然する	下ア　うる	四サ　おどろかす	一カ　きる	變サ　する	四カ　きく	四ラ　たまはる
他に然する			下サ　きする		下サ　きかする	四ハ　たまふ
他に然さする	下サ　えさする		下サ　きせさする	下サ　せさする	下サ　きこえさする	
おのづから然せらるゝ	下ラ　えらるゝ	下ラ　おどろかるゝ	下ラ　きらるゝ	下ラ　せらるゝ	下ラ　きかるゝ	
他に然せらるゝ	下ラ　えらるゝ	下ラ　おどろかさるゝ		下ラ　せらるゝ	下ラ　きかるゝ	

さて春庭は助動詞といふやうなものを分けて認めてゐないので、之等の言葉をすべて夫々一つのものと考へてゐたやうである。そして、

　自他のわかるゝ事、詞の活による事なれば、其いひざまさま〴〵なれど、同じ行にてわかるゝと、佐行にうつりてわかるゝと、羅行にうつりてわかるゝとの三つなり。この三つにあづからぬもなきにはあらねど、いと〴〵まれなる事なり。

といつて、これらのかはり樣について詳細に研究してゐる。

春庭のこの自他の分け方は、一寸見るとはつきりしてゐるやうであるが、よく考へるとぼんやりしてくる。おのづから然るは今いふ自動詞のやうである。みづから然すると物を然するとはどう違ふか。みづから然するは、自動詞の中の人間の動作をさすと考へられるやうであるが、又

○加行より佐行にうつりて自他のわかるゝ例

加行四段活　　佐行下二段活
おく　　おかする
かく　　かかする
さく　　さかする
はく　　はかする
ふせぐ　　ふせがする

右、上なるはみづから然するをいふ詞、下なるは他に然さするをいふことばなり。

といつてゐるやうな所もある。かうして、今他動詞といはれるものも、みづから然する方に入ることがあるとなると物を然するとの區別がなくなつてくる。考へやうによつては、物を然する中には、他が物を然するのと、みづから物を然するのとある譯、他に然するのでも同樣である。前に抄出した圖の例で考へても、着するが他に然するといふ所にあり、着せさするが、他に然するといふ所にあるのでみると、

子供に着物をきす。……他に然する
下女して子供に着物をきせさす。……他に然さする

といふことになるやうであるが、同じく他に然さするといふ所にある、えさする、せさする等は、之と同じではないやうである。他に然さする中にも、みづからするのと、命じてせしむるのとあるから、それが一緒になつてゐるので、分らなくなるのである。又、他に然せらるゝ例に「聞かるゝ」だけかあげてあるが、上の例を考へて來ると「聞かせらるゝ」といふのもあつてよいやうである。おどろかさるゝの場合には、驚くものは自分であり、きかるゝの場合には、きくものは自分ではなくて他である。故におどろかさるゝが他に然せらるゝ所にあるなら、聞かせらるゝも同じ所にありうる。さうでなければ、他に然させらるゝといふ段を設けて、おどろかさるゝやきかせらるゝを、そこへあげねばなるまい。即ち他に然せらるゝといふ意味もぼんやりしてゐる譯になる。また考へれば、きこゆるときくとは一列におくべきものでなく、

きこゆる………きこえさする
き　く………きかする

と相對すべきもので、きこえさするときかするとは、何れも他の然するといふのに當るべきものではないかとも思はれる。

山田孝雄氏も日本文法論で次の如く批評してをられる。

其の分類は頗精密なるが如し。然れども其の說く所果して一點の疑惑をも挾ましめざるか。第一に問ふべきはこ

の六種は如何なる順序を經て別れたるものなるか、其の分釋の原理は如何といふことなり。然れども其の書ども更に分釋の原理を示さず。この故に今其の名目の間に矛盾を有することなきかを檢して、其の分類の妥當なるか否かを決せむ。先第一に、「みづから然する」とは二種の義に解せらる。即一方よりいへば、みづからのみの然することとなるべく、一方よりいへば、所謂「物を然する」も「他に然する」も皆みづから然するにあらずや。次に又「物を然する」「他に然する」の差別は如何。「物」と「他」とは異か同か。之を明にせざる時は混同する恐なきか。根本の問題たるべき自他とは如何なる義か。自とは「おのづから然る」「みづから然る」の「おのづから」「みづから」の意なるか、他とは「他に然する」「他に然せらるゝ」の義か。然らば「物を然する」は自なるか他なるか。かくて自を以て「おのづから」「みづから」の義とせば、七名目殆みな自ならずや。又若自他を唯單に「他に」といふ語の有無によらで、「自」「他」が發動の主たる場合の區別とせば、次の如き分類となるべし。この場合に於いては、「おのづから」の二種は自他以外にあるものとなるべし。

自 ｛ みづから然する。／物を然する。／他に然する。／他に然せさする。

他……他に然せらるゝ。

自他以外……おのづから然る……おのづから然せらるゝ。

かうして、春庭の自他の研究は、はつきりしてゐないものではあるが、とにかく混沌たるものを、これだけに整理して示してくれたことは、大いに感謝せねばならぬ。

時代は前にもどつて、あゆひ抄の著者富士谷成章にも動詞に關する研究があつたのである。成章は今いふ動詞形容詞を一括して裝（よそひ）と名づけてゐた。あゆひ抄の如く、裝抄があつたやうであるが傳つてはゐない。けれどもその研究の方針の大體は、あゆひ抄のおほむねの中にある裝の說によつて知りうる。

師曰（記者云、師は成章をさす）裝の事は其抄あれども、あゆひの例はよそひによりてさだむべきを、此抄をよまむ人裝にくらくしては心えがたかるべければ、いさゝかそのおもぶきばかりをこゝにはいふなり。凡裝には二むねあり、事とさまと也。こまかにいへば事に二むねあり、事とありなと也。狀に四むねあり、しざま・しきざま・ありさま・かへしざま也。裝二むねともいひ六むねともいふは此よし也。六むねをおしこめて裝といふ。むねごとに本・末・引・靡・きしかた・めのまへ・あらまし・靡伏・ふし目・たちもとのすぢ〳〵あることは、こゝにいひつくしがたし。左にいだせるかたがきを見てかつ〳〵心うべし。

その裝圖といふのは次の如きものである。

	本	末	引靡	往	目	來	靡伏	伏目	立本	無末無靡
居	う			ゐ	ゐ	ゐ				
來	く		ル	き	こ	こ	レ			

裝											
事	事	爲	す		ル	し	せ	せ	レ			無末有靡
事	事	寢	ぬ		ル	ね	ね	なね	レ			無末有靡
事	事	得	う		ル	え	え	え	レ			無末有靡
事	事	見	み		ル	み	み	み	レ			無末有靡
事	事	打	う	つ		ち	て	た				有末無靡
事	事	思	おも	ふ		ひ	へ	ほは				有末無靡
事	事	捨	す	つ	ル	て	て	て	レ			有末有靡
事	事	落	お	つ	ル	ち	ち	とち	レ			有末有靡
事	事	恨	うら	む	ル	み	み	み	レ			有末有靡
事	事	越	こ	ゆ	ル	え	え	やえ	レ			有末有靡
事	孔	有	あ	り	る	り	れ	ら				有末有引
狀	在	遙	はるかな	り	る	り	れ	ら				有末有引
狀	芝	早	はや	し	き	く				け	か	有末有引
狀	鋪	戀	こひ	し	キ	ク				ケ	カ	有末有靡

註（一）圖中ノ標字。事(コト)狀(サマ)孔(アリナ)在(アリサマ)花(シザマ)鋪(シキザマ)本(モト)末(スエ)引靡(ヒキ・ナビキ)往(キシカタ)目(メノマヘ)來(アラマシ)靡伏(ナビキフシ)伏目(フシメ)立本(タチモト)

（二）引靡は、孔・在・芝には引といひ、其他には靡といふ由斷つてゐる。

（三）かへしざまについては、

狀(サマ)は四むねあること前にいふがごとし。ただし芝狀(シザマ)鋪狀(シキザマ)はおなじやうにて、在狀(アリサマ)返狀(カヘシザマ)はたこしへなくかはれることおほきゆゑに、狀とのみいふときは、おほくは芝(シザマ)鋪(シキザマ)狀のふたつをさせり。

といふ言葉と、

かへしざまは末靡なきゆゑに左のかたがきにはぶけり。

といふ言葉とあるだけで、實例が示してない。

ありをありなとして事から分けたのは、意味の上からであらう。在狀(アリサマ)は所謂形容動詞、芝狀(シザマ)はク活、鋪狀(シキザマ)はシク活であることは圖で見る如くである。名稱は活用の形からつけたものと考へられる。きしかた・めのまへ・あらまし・靡伏等名がむづかしい。それよりも春庭の八衢における圖に比して、見なれないせゐもあらうが、見にくい。解し難い。かくてあゆひ抄の後繼者が少かつたやうに、裝の研究も之をうけついで大成する者がなくて終つたのは遺憾である。

春庭の動詞の研究を補つて大いにつとめたのは東條義門である。眞宗聖敎和語說、和語說略圖、活語指南、山口栞、活語雜話、活語餘論、指出の磯、磯の洲崎等の著がある。

眞宗聖敎和語說は五卷、三部經和語說ともいふ。天保三年(二四九二)から翌年にかけて、義門が聖敎の和語にかゝ

はるテニヲハや言葉遣等について講述したものを門人が筆記したもので、第一卷は明治十一年に刊行されたが、他は寫本である。はじめに

凡そ三部經の訓讀を始め、七祖の聖教、御當流の御訓み僻、祖師聖人以下御先德の御假名聖教、御和讃御文等の御詞遣ひに就て、和語にかゝはる語辭（テニハ）のこと、古來歷々の學者方の宜き辨もあらんかなれども、此方の寡聞淺見未見聞、又已に見聞したる中ちには、何うもほつこりせぬと存ずること共も多有之に就ては、是は當今學問盛になれる時節に殘念なる哉、祖訓を伺ふ一つの缺典といふべしと竊かに存じ居ること也。

とある。この爲の圖ともいふべきものが前章にも名をあげた和語說略圖である。友鏡においてもすでに將然言連用言等の名がつけられてゐるのであるが、これでは使令を希求言と改めてゐる。八衢では名をつけてゐないのを、義門がかうつけたので、その名は現代までも便利として用ゐられてゐるのである。八衢の四種の活、カ行サ行ナ行の變格の外に、形容詞のク活シク活、助詞詞き・ず・じ・む・まし、有り及びその系統の助動詞等の活用が一目に見渡せるやうにしてある。

次にこの和語說略圖を詳解したものが活語指南である。義門の序が天保十一年(二五〇〇)十月の日附である。それによれば、義門が詞八衢について考へたことを記したものを友に見せたら、

やちまたの街ことぐ\踏分ヶて猶も奥ある道のしるべか

といふ歌をよんで、「詞の道しるべと名づけばや」といつて來た。それは三十年も前の話。でさう名づけておいたが、後故あつて、活語指南と改めた。いつぞやそれを取出して見たら、省きたい所や加へたい所が澤山に出來たので、清書しようと思ひ立つた折しも、平井重民といふ人が來て、略圖考證と題した書を見せた。それは和語說略圖を詳說したもので、將然言から希求言までの六つの例證をあげたのなどは、自分の活語指南よりも優つて、「これぞ初學を導くべきふみ」と思はれたので、自分の方のはそのまゝおいて、これを世に弘めようと思つてその稿本を補正した。それに平井の友青山茂春といふ人が俗語の解を施し、活語指南と名づけて出版したのだといふ。上下二册ある。平井重氏、青山茂春の二人の序もある。茂春の序に、

此書は初より初學の徒のひろげみんすなはちに、かやすく意得ん樣にとて、都ては略圖演說の聞書をもとにて、それに證歌どもを補ひなどしたるなん。平井氏の心入れのしわざに有ければ、文章だちてはもとよりあらはさざりしなれど、さりとてもはら俗（サト）びごとにてはあらざりしを、かゝる書はかうやうにと、わがえせ心よりさしいでてむげの俗言に大かた譯し物したるは、此中書をも又板にゑりぬべき下書をもとのあつらへにしたがひたる、ひら井の友青山茂春。

とある。

將然言（シヤウゼングン）（マサニシカラントスルコトバ）　コレカラドリヤト初メカケル、コレカラユクサキノコトヲ云、但シコレハ一端ニツキシバラク名ヅケタル名目也、未然言ナドヤウニ云テモ可ナリ、コレハマヅ擧ニ一隅一示ニ三隅一トイヘル風情ナリトシレ。花サカバト云ヘバサカヌサキニ云ヘルニテ、カノサケバト云ヘルハチヤントサイテスンダヲ云（ソレハ）已然言ニ對スル名目ナリ。

といふ調子で、連用言截斷言等の術語を述べ、活(はたら)くといふ意味を示し、和語說略圖について順次に語例をあげて說いてゐる。略圖の最初はク活の形容詞で、無しといふ語が例に出てゐるので、その所の說き方の一例を示せば、

|く|　將然

將然言

將然ヲ受ル辭也。凡ソ此ニ二ツアリ、一ハ將然ヲウク、即コノ聲なくはノは也。今一ツハ已然ヲ受タ、聲なけれはト云フトキハソレニナル。コヽハ初テノ處故斷迄斷リオク自下準知スベシ、

○うぐひすの谷より出る聲なくば春くることをたれかしらまし

コノ書ハ言語(コトバ)ノ活用ノコトヲノミムネトスルナレド、初學ノタメニ引歌ノアラマシヲ俗(サト)ビ言シテ聊ヅツイヒモテユキツヽ、イハユル活用ノコトヲ云ベシ。サルハあゆひ、かざしノ二抄ニ根ザシケントオボシクテ、カノ古今遠鏡ニ雅言ドモヲ俗言モテ諺譯セルニ傚テ物ス、然ラデハワラハベノ爲ノニハタドタドシキノミナランソトテゾ。マヅ此歌ノアラマシハ、谷カラ鳴テ出テクル鶯ノ聲ニ春ノキタノガシラレルガ、モシ此聲ガなくば春ノ來タコトヲ誰ガシラウゾト、コレカラサキノコトヲ云也。なければトイヘバ既ニ無イニヨツテノコトヲイフノニ對シテ考フベシ。

山口栞は上中下三卷。文政三年(二四八〇)藤井高尙の序があつて、

みやびことばのはたらくやうをわきまへずして、歌よみ文かくは、しらぬ山路をゆく人のふみまよふにいとよう似たれば、言のは山にわけいる人の山口の道のしをりにかきあらはしたる此書こそ。その人は若狹の國小濱の里に義門法師ときこゆる人、十とせばかり過にし年みやこにてはじめてあひしより、此年ごろおのれを師のやうに思ひたのむ人になん。(下略)

といつてゐる。義門の跋に次のやうにある。

此書は文政の初めつかたに書置しを、ことし天保四年といふ年の夏のころより、ひともそゝのかすによりて、おほけなくも櫻木にとおもひなりにて、はこの底よりとうでて見るに、そこここはぶきも補ひもせまほしかるこれかれとあれば、いま一たびと寫すにあはせて、詞通路といへる書を得つ。八衢とひとつ手より出たるもしるくげにはた詞のはたらきの學問のよきしるべ書にぞあれば、それにゆづらひて省くべき、あるはそれみてこれ聊づつあらたむべうおぼゆるところなどもまじるまにまに、とかく挍へ合せつゝかくものしをへぬるは霜月十日といふ日

みやこの旅のやどりにして　　　若狹義門

刊行は天保七年(二四九六)である。上中二卷は動詞、下卷は主として形容詞に就ての研究である。上卷の目錄の一部分を示せば、

○總論　言語音聲の轉ずるに凡そ三つの差別有る事を示す
○用言とさらぬ詞の音の轉るとのわきだめ
○中二段と下二段とに活く語の事
○つねによく誤る活ども

○しし　せし
○さん　せん
○して　せて
○せす　すべて將然言よりさしすせと活く例
○るゝ　らるゝ
○する　さする
○又　ひかせさす
○又　ふかせらるゝ
○又　する　さする　せさする

といふやうな風で、こまかな部分々々についての研究である。その總論には

人のことばの何くれとうつるこゑに凡そ三のけぢめありと思はる
一にははたらきことばのおの〳〵用きつかさどる所に隨ひつゝ必その音のかはる
二にはゐことばながら、ふたつあひつらなる其ところのさまによりておのづからに其音のうつる
三には用言體言ともにかならずかくとのさだまりあるにはあらで、只いつらのこゑのこれかれとかよへる
此三なり。然るにこれをば皆おしなべてたゞ五音相通とかいひて、あらくのみ意得ためるなどは、その轉り出る音によりて意ばへの異なるも同じきも其筋混ひて、ことのこゝろをとかんにも、つひにはあやしうもてひがむることもやあらん。

といひ、次の「用言とさらぬ詞の音の轉るとのわきだめ」の所で、「用言のはたらきの音はその音々によりて其言の趣も異になる也。又たゞ體言の轉音はしからず。」といつて用言の活用といふものを明かにしてゐる。

かうして以下前掲の目錄にあるやうな題目について詳細な研究をのべて、世人の誤りを正し、或は詞八衢の不足を補ひ又說の誤を正してゐる。その考證は綿密でその一例をあげるなら、次の如くである。

くゝ

八衢に加行四段活の處にくゝとあげて、古事記と萬葉とを引てあれど、其證書どもよ、四段活といふことを證するにさだかなるはひとつもなし。さるによりてある人の定めいへらく、これは中二段の活とおぼしきなり、其故は萬葉四卷に敷細乃枕從久久流淚二曾浮宿乎思家流戀乃繁爾とあればなり、といへりしを、げにとおもひしことありき。しかれども今考るに此久久流は別の事にて、くきんと活くにはあらじ。たゞ羅行四段に活く流文字なるべし。かの古事記なる久岐などは猶加行四段の活きなるべし。その證は萬葉八卷廿八このまたち八十一霍公鳥と見え、同十七卷二十七しげみとび久久鶯乃云々と見えたるは、ともに連體言にくゝとあるにて明也。

(參考)――八衢には次の三例があげてある。

わがたなまたより久岐斯子也(古事記上)
足引の山邊にをれば霍公鳥木のま多知久吉鳴かぬ日はなし(萬十七)
遙々になく霍公鳥立久久等羽ぶりにちらす藤浪の花(萬十九)

八衢には前にものべた通り形容詞の研究がないので遺憾とされてゐたが、それは山口栞の下巻における義門の研究でみたされた、この中に、ク活とシク活と紛らかして、例へば「悪し」を「悪しし」といふのは誤であるといふ説も見える。又「何けく」といふやうな言葉について、

ある書に何くといふを何けくといふは古語にて、よくをよけく、あしくをあしけくといふたぐひなるを、靈けくといふのみは、かたへの例なき詞なりといへり。げに長くを長けく、安くを安けく、よしあしくをよけくあしけく、とやうにいふは古書のさま也。さてよけくあしけくなどは、よくあしくともいふ詞なるを、露けくのみは、露く、つゆきなどはいはぬなれば、右の説はこゝに意しらひせるにて、くはしき説ともいふべき也。されど古へも今は何くとのみいひて何けくとはいとふるくよりもいはざりけんと覺しきもあり。又何けくとのみいひて何くとは古今ともにいはずとおぼしき詞どももすくなからず。可く、いぶせくなどを、べけく、いぶせけくとやうにもいひしものとは思はれず。此類も多し。又平けく・明けく・のどけく・などは、みなけくけきとのみ活きてたひらく・あきらく・のどくとやうにはいはざるやうに覺ゆ。すべて何かにといふ詞どもは皆何けくとのみ活きて、何くとはいはざるかとおもはる。たとしかの露けくはつゆかにとはいはざるなれば、これは又聊異なる例といふべし。さて此らにて何かに・何かなるとのみいひて、何けくとはさらにいはざるもあり。わづかおほらかなどの如し。

といふ研究もある。

又「風をいたみ」「さやけさ」といふやうな場合の圖を示してゐる。即ち次の如くである。

ク　シ　キ	長ナガ	ミ	ゲ	サ	ケン　ケメ	ケク	ケマシク	ラ　カリ　カル　カレ
		風をいたみ	ねよげにみゆる	音のさやけさ	事のしげけん　かしこけめやも	なにぞはよけく		ながからん心も　うかりける人を　物うかる音に　なかれ
シク　シ　シキ	空ムナ　シ	君をやさしみ	をしげにもあるか	うれしさを	うつしけめやも　こひしけんかも	あしけくもなし	ひさしけまくに	をかしからざりし　うれしかりけり　こひしかるべき　はげしかれとは

次に活語雜話は三册あり。活用語の個々についての研究を集めたもので、初編は三十箇條、二編二十五箇條、三編二十五箇條、すべて八十箇條ある。初編の初稿は天保四年二月十二日に出來た。天保九年閏四月の城戸千楯の序がついて、天保十年(二四九九)二月に刊行になつた。

此小濱なる友とかたらひあへる友どもはもとよりにて、又みやこに江戸にまゐりつるをり〳〵、そこの人々あはくに〳〵よりまうでをふに値アヒたるにも、すべて言葉の活らきにあづかれることどもをば、其すなはちにも或はほどへてふと思ひいだしてにも、物のはしなどにはかなうかいしるしおけるが、いつしかと數多くなりにけるをば、さてはふらかさんもさすがなるこゝちするまゝに、甕のくち覆ひとしたりし反故どもをさへさらにとり出て見るに、いまはよめずなれるもあるはせんすべなけれど、そのすぢなほわかれたるかぎりをば、これかれとをち〳〵にかきつらねゆくついでに、または人とあひかたらへるにはあらぬも、これらは初ひまなびの爲さもならん

かとおぼゆるどもなにくれとかきくはへて、活語雜話と名づけものするは、天保と云ふとしはじまりて四とせになれる春のなかばなる月の、とをかふつかの日　　　　若狹　　義門

とあるのでその成立の大體がうかがはれよう。內容は名の通りの雜話で、その題目の一部分を示せば、

(一)自他の詞の事
(二)をれる斗(バカリ)ぞ女郎花」
(三)給はせる　給はせたる。
(四)いたる　いたれる。
(五)四段のはたらきの第四音けせてへめれよりらりるれとはたらきたることばどもと、その第二音きしちひみりをたるとうけたる詞どもとの同異。
(六)さける　さきしの類
(七)こりさする　こらす

第二編は天保十年正月に出來て翌年刊行、第三編は天保十一年十一月に出來て同十三年に刊行になつた。この三編八十箇條何れも國語研究上好材料でないものはない。第三編の終りに、用ふといふ言葉について、今までハ行に用ひてゐたが、第三編からワ行に改めたが、その理由は四編にのべるつもり、とにかく、「和行上一段の活用ぞとなむ我は思定ノつるかし」と記してゐるが、四編以下は世に出なかつたのである。

活語餘論三卷は寫本である。天保十三年の自序がある中に論じてあることは活語に關することばかりではないが、

それではじめは「題しらず」としておいたが、ある友人が、

この册子よ、ひらき見るまづのをちに、次でも「知らず」「知られず」の言葉の活きのさたあり、さて垂り尾垂れ尾のけぢめやうのことくさ〲、「狐にはめなん」のはめを令食なりといひ、また洨入なりといふときごとをば、詞の活きの條理より正し評せる、或は「たゆ」「たやす」「たつ」の自然使然の議め、又「ばかり」「といふ辭の裁るゝ言を受ると、體に連く言を受るとの別をつまびらかにせるたぐひ、すべて活用語辭の論說ども卷々に多かれば、このふみにも活語の二字を標せられんはいかに。

といつたのでかく名づけたと自序にある。

指出の磯一卷は文化十二年(二四七五)に出來たが刊行はずつと後で、天保十四年(二五〇三)である。文政三年本居大平の題辭、天保十三年の本居內遠の跋がある。この書は石田千頴が、「きならしゝ」と「きならせし」と何れが正しきかを疑つてゐるのにこたへて、詞のはたらきを正しくすべきことや假名遣のことなどを論じたものである。この書を文政三年に義門が京都へ行つたとき、淸水濱臣にあつて見せたら、濱臣は詞の活用と假名遣の大事こ同等にいふのは如何、その理由をきゝたいといつて「泊洦筆話」を出した。で義門はそれに答へて、活用をなほざりにすまじきこと假名遣のこと等について意見を記した。それが磯の洲崎一卷で、文政三年に出來、天保十二年に補つて、天保十四年に指出の磯と合せて一册として刊行した。

活用の硏究は義門のこれらの著書によつて大いに進められ、殆ど完成せられたともいふべく、今日の文典は義門に負ふ所頗る大なるものがあるのである。

さて義門は天保十四年（二五〇三）に歿した。次には義門の前後に於てあらはれた活用に關する著書の若干について略述して、この章を終りたいと思ふ。

「辭の玉襷は上に「詞八衢捷徑 詞玉緒栝括」と割書がある。動詞形容詞の活用を表につくつた一枚の圖で、著者は富樫廣蔭、文政十二年（二四八九）に刊行された。この圖では八衢が四段の活中二段の活などといつてゐるのを改めて、四段の活は四韻詞、一段の活は一韻詞、中二段は伊迂（イウ）韻詞、下二段は衣迂（エウ）韻詞とした。又、義門が將然言・連用言などと言と稱してゐるのを段こ改め、未然段・續詞段・斷止段・續體段・已然段とした。八衢の四段・二段等は五十音圖による段數からつけた名であるが、彼は詞の活用は奈行變格は別として、すべて未然段以下已然段までの五段に活くものであるから、四段の活二段の活などいふは不適當であるとして、變化する韻の數によつて四韻詞などを改めたのである。この玉襷を説明したものが同人著の「詞の玉橋」である。二卷あり、一の卷は文政九年十一月脱稿したが、翌年訂正し、天保十五年に更り校正してゐる。

黒澤翁滿の言靈指南（コトダマノシルベ）は上卷は天保四年（二四九三）に脱稿、嘉永五年（二五一二）刊行、活用、テニヲハ、假名遣等について説がある。活用については、種類を九種に分けて、

四段の活、　　四段再の活（咲けらんᵒ・押せらんᵒの類）、

一段の活、　　上二段の活、（中二段を改めたのである。）

下二段の活、　　三段の活、（來爲（くす）等）

三行の活（褒みᵒ・寒さᵒ・寒しᵒ・寒きᵒとマサカ三行に活く類）

二行の活（久しᵒ・久しきᵒの如くサカ二行に活く類）

一行の活（幽・速・明の如くカ・ケに活く類）

としたのを注意すべきである。かくて變格の名を發したのであるが、ナ行とラ行の變格を四段の中に入れて、何の注意も與へてゐないのは手落ちである。

足代弘訓の著書には、八衢大略・八衢補翼がある。前者は一卷、初學の爲に八衢を主として語法を授けむとしたもので、安政四年正月の佐々木弘綱の奥書をつけて刊行。後者は未定稿で寫本である。

萬葉集古義の著者鹿持雅澄の用言變格例一卷は、動詞の變化について、四段活用を常格とし、其他を變格として、四段活用が動詞の古形であるといふやうな意見をのべたものである。

長野義言は言葉の自他について、研究し、自の言葉が他に轉じ、他の言葉が自に轉ずる理由を解説しようと試みた。その著書は活語初の栞といひ、一卷、弘化三年堀内廣城が校合してゐる。

中島廣足の詞の八衢補遺は上下二卷、上卷はその名の通りで、八衢にもれた活語を補つて種々の考をのべたもの、もとは大部のものであつたが、義門の山口栞を見るに及んで、重複した所を削り去つたのだといふ。下卷は同じく詞の考へではあるが、八衢には關係のない記事である。嘉永六年（二五一三）に出來、安政四年（二五一七）に刊行になつた。

詞の通路の自他を整理して、通路が六段に分けたのを四等に分けて、

第一等　然る詞

第二等　然する詞

第三等　然せさする詞

第四等　然せらるゝ詞

としたのは、黒川春村で、その書は活語四等辨といふ。春村はこの書で、第一等第二等は四種の活に渉つてゐるが、第三等はサ行下二段、第四等はラ行下二段に限ると説いてゐる。又第二等のサ行四段に活くものと、第三等とは紛れ易いことを注意し、遊ばす•遊ばする、移はす•移はするの類をあげてその差を説いてゐる。

最後に野々口（大國とも）隆正の活用に關する意見をのべてこの章を終る。隆正の著書には、通略延約辨、活語活法、活語活法活理抄、神理入門用語訣等があるが、何れも活用についての說は大同小異である。こゝには通略延約辨を紹介しよう。これは天保五年(二四九四)五月に出來たもので一册である。內題には

ことばのすみなは　初集

通略延約辨

とある。總論の中に

世の古言をとくもの、眞淵翁の謬說にしたがひ、古言をおのが私情にまかせて、通はし略き延べ約めてときなすは、まことになげくべきわざなり。世の大人たち古言をとくといひて古言の意をうしなふこと五(いつゝ)あり。そのひとつには沿革の理にうとく、ふたつには正訛をわきまへず、三には合語の法をしらず、四には活語にくはしからず、五には通略延約をもてみだりに名義をとく、これなり。このいつゝのあやまりみなそのもとは通略延約をあしく心得るよりおこれり。これにより今そのいつゝのあやまりをたゞし眞の通略延約の用法をしらしめんとす。

といつてゐるので、この書の目的は知られよう。沿革の理とは、言語は時代と共に變遷するもので、古事記日本書紀では「やすみしゝわが大君」といふのを、萬葉では「やすみしゝわご大君」とあり、古くは忘らえ忘らゆといつたのを古今集以後は忘らぬ忘らるとあるのも、時代的變遷であつて、たゞ通音とのみいふべきではないといふのである。合語の法は熟語の出來る場合の音の變化である。で結局、

古言に音通同意といふことはたえてなきことなり、合語は音を轉ずるにて、活語はことばの活用なり。そのほかはみな訛にて正語にあらず。

といふ意見であるが、その活語の說明が八衢とは變つてゐる。彼はいふ。

はたらきことばの格をとけるふみ、は本居春庭の詞のやちまたなり。隆正がたつる解法はそれと異なり。まづ活語を二つにわけて自行他行といふ。（中略この他行の活法(ハタラキザマ)三種あり。やちまたは活法を四種にわかてり隆正はそのうち一段のはたらきといへるものを自行につくるにより三種になる也）そのひとつには一二三四のはたらき、二つには三四のはたらき、三つには二三のはたらきこれなり。

聞(かんずき)　く　け　〔ヨ〕　一二三四のはたらき。

受　〔カ〕　〔キ〕　く　け　〔ヨ〕　三四のはたらき。

起　〔カ〕　き　く　〔ク〕　〔ヨ〕　二三のはたらき。

かくのごとく三にわけ、これによりて又人爲天然の用法をわくるなり。人爲はひとのするなり、天然はおのづからしかあるなり。

人爲を三四にていひ天然を一二三四にていふことばあり

附 [カ][キ] く けん(て) [コ] 人爲
　　└[ラ][リ] る れ [ロ]
かん きて く けど [コ] 天然
　　└ら り る れ [ロ]

又これに反して人爲を一二三四にて、天然を三四にていふあり

裂 かん きて く けど [コ] 人爲
　　└ら り る れ [ロ]
[カ][キ] く けん(て) [コ] 天然
　　└[ラ][リ] る れ [ロ]

いかなればかくのごとく人爲と天然といりかはるといふに、つけて・つきてこいふたぐひは、はなれてあるものを合することばに用る格なり、又さきて・さけてこいふたぐひは合てあるものをはなすこゝろのことばに用る格なり、この外さまゞゝの對格あり。

註(一) 一般活用は例へば、き(着)る、きれともなるが、きだけで語をなすから自行といふ。二段活用でも得經(うふ)等は自行である。

活語活法や活理抄では本行活と改めてゐる。

(二) 聞・受・起等はき・う・お等で語をなさず、他行をかりて語を成し活用するといふので他行といふ。これも後には借行と改めてゐる。

(三) 一二三四は五十音圖によつてア列を一、イ列を二として順次に數へたもので、その例の通り一二三四は四段活用、三四は下二段活用にあたる。㋙㋕等は一二三等が分り易いやうに活用しない所の音を便宜示したまでのもの。

かうして、附くと裂くとは意味が反對であるから、自他の活用が相反するといふのである。彼は對格と稱して、かゝる類を對にして說くことが多い。(終)

附言

序說にのべた所とはやゝ趣をかへて、かゝる講述の方法をとつて來た本講においては、なほ文典・辭書・語源等について一瞥を與へ、最後に序說にのべた各期の概觀をのべて終りとするつもりであつたが、遂に豫定通り運ばなかつたのは遺憾である。しかしやがて續國文學講座に於て、別な形に於て或點までは補ひうるであらうと期待してゐる。

（第一回配本）

第一回二冊の内
非賣品

昭和五年四月十五日印刷
昭和五年四月二十日發行

國文學講座
全二十八冊の内
國語學史

編輯兼發行者　受驗講座刊行會
右代表者　加藤雄策
印刷者　濤川薫　東京市麹町區下六番町一〇

發行所　東京市麹町區下六番町一〇　株式會社平凡社内
受驗講座刊行會
振替口座東京二九六三九番

株式會社平凡社印刷部印行

エトP-95

終